

## 研究プロジェクト成果報告書

### 研究課題

幼児教育に関する教員の意識と指導の実際—幼少連携を促す要因の探求—

研究期間 平成 26 年度～平成 27 年度

### 研究組織

氏 名	所属・職名（専門）	役 割 分 担
角谷詩織	学校教育学系、准教授（発達心理学）	研究プロジェクト代表、研究全体の統括、進行を行う。 主に幼児期に必要な教育観に関する調査を行う。
周東和好	芸術・体育教育学系、教授 （体育科教育学、スポーツ運動学）	主に運動、健康指導に関する調査を行う。
白神敬介	学校教育学系、講師（発達心理学）	主に調査全体について、対象者の校種、教育・保育歴との関連について分析を行う。
吉澤千夏	自然・生活教育学系、准教授（児童学）	主に生活の自立に関する調査を行う。

## 1. 目的

近年の幼小連携に関わる様々な教育実践報告では、幼児教育から小学校教育へ“いかに接続するか”という観点から取り組まれているものが多い。これらの報告は、各々の教育における指導内容は共通理解されている、ということが前提になっているものと思われる。幼稚園教育要領や保育所保育指針および小学校学習指導要領は目標を示しているものであり、具体的内容について、逐一示しているものではない。そのため、具体的な指導内容については、教育実践にあたる保育者（幼稚園教諭および保育士）と小学校教員に、直接尋ねることによってしかわからない。また、その具体的な指導内容について共通認識されていることは、幼少の連携に必要なことと言える。

そこで本研究では、上記を踏まえ、保育者及び教員によって意識されている具体的な指導すべき内容を明らかにすることを通して、幼保小連携を促すための要因や知見を探ることとする。具体的には、幼児教育・保育と小学校教育の連携が目指されている現在、幼児期の教育において保育者・教員が必要と考える内容は、保育者・教員にどのように意識されているのか、その内容は一致しているのかといった問題について、幼児期の教育内容、生活の自立、運動・健康面の視点からアンケート調査により明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査対象

保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭としての勤務経験を持つ者、のべ168名である。このうち、平成26年度に取得したデータは86名、平成27年度に取得したデータは82名である。

### (2) 調査の実施

調査にあたっては、幼児期の教育において意識されている指導内容を捉えるために、調査対象者の属性に関する質問及び12項目（平成26年度）または27項目（平成27年度）の幼児期の子どもに必要な教育観、生活の自立、運動・健康指導に関する質問からなる調査紙を作成する

（表1）。回答は、「小学校以降の子どもの適応的な発達を促すために、幼児期の教育において、以下のこと(12項目：平成26年度版または27項目：平成27年度版)は、どの程度必要だと思いますか。あてはまる数字に一つだけ○をつけてください。」という問いに対して、4段階（1. 全く必要ない、2. あまり必要ない、3. 必要、4. とても必要）での評定を求める。

上記の調査紙を用いて、保育者（幼稚園教諭・保育士）および小学校・中学校・高等学校教諭を対象に調査を実施する。

### (3) 分析方法

分析にあたっては、27項目からなる調査項目を1) 幼児期の子どもに必要な教育観、2) 生活の自立、3) 運動・健康指導の大きく3つの観点から集計等を行うとともに、調査対象者の属

性、特に勤務校種と保育・教育歴との関連を捉える。

表 1 質問項目一覧

<1> 外で身体を動かして遊ぶ。
<2> 草花、生き物など、自然と親しむ。
<3> 英会話を習う。
<4> 絵本の読み聞かせを行う。
<5> 平仮名の書き方を教える。
<6> 絵を描く機会を与える。
<7> 歌を歌う機会を与える。
<8> 一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。
<9> 手の届くところに触りたいものがあったとしても我慢させるなど、敢えて我慢する機会を設けて指導する。
<10> 出来る限り大人(保育者や親)が指示を出さないような関わり方をする。
<11> 子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。
<12> 友だちとのトラブルを経験する。
<13> 食具等を正しく使って食べることができる。
<14> お腹が空いたら、食べたいものを自分で用意できる。
<15> 衣服の着脱が一人で出来る。
<16> 気温や天候に合わせて、衣服の着脱が自分で出来る。
<17> 遊んだ後の片付けができる。
<18> 身の回りの空間等を自分が心地よい状態にできる。
<19> とび箱で開脚とびができる。
<20> 鉄棒で逆上がりができる。
<21> 用具、遊具を用いて、あるいは用具なしで、様々な動きができる。
<22> 遊具での順番待ちをすることができる。
<23> 仲間と協力して運動用具を準備することができる。
<24> 鬼遊びやスポーツのルールを理解して、ゲームすることができる。
<25> 遊びに没頭する。
<26> 屋外での集合の際、きちんと整列できるように訓練する。
<27> 椅子に座る姿勢を良くするように指導する。

### 3. 結果および考察

調査は 26 年度、27 年度の 2 回にわたって行われたため、以下の結果および考察については、それぞれの年度において得られたデータをもとに分析した結果を記載する。

#### (1) 勤務校種による幼児期に必要な教育観の差異について (平成 26 年度)

幼保・小・中・高校の教員 86 名 (男性 26 名、女性 59 名、不明 1 名) から回答が得られた。回答者の勤務校種の分布は、保育所・幼稚園が 13 名 (15.1%)、小学校が 37 名 (43.0% : 低学年 27 名 (31.4%)、高学年 10 名 (11.6%))、中学校が 14 名

(16.3%)、高校は17名(19.8%)、不明が5名(5.8%)であった。保育士・教育歴の平均は18.1年であり、最大値は33年、最小値は4年であった。

まず、「幼児期に必要なこと」に関する質問項目毎にその平均値及びSDを示す(表2)。最も得点の高い項目は「<1>外で身体を動かして遊ぶ」(3.95)であり、最も得点の低い項目は「<3>英会話を習う」(2.12)である。12項目のうち、比較的「必要ではない」と考えられていると思われる平均値2.5以下の質問項目は、上記の「<3>英会話を習う」の他にはなく、本調査において問われた項目の多くは、「幼児期に必要なこと」と捉えられていると考えられる。

表2 質問項目毎及び因子分析による合成変数のM、SD

	M	SD
<1> 外で身体を動かして遊ぶ。	3.95	.21
<2> 草花、生き物など、自然と親しむ。	3.87	.34
<3> 英会話を習う。	2.12	.61
<4> 絵本の読み聞かせを行う。	3.85	.39
<5> 平仮名の書き方を教える。	2.54	.81
<6> 絵を描く機会を与える。	3.62	.51
<7> 歌を歌う機会を与える。	3.59	.54
<8> 一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。	2.94	.64
<9> 手の届くところに触りたいものがあっても我慢させるなど、敢えて我慢する機会を設けて指導する。	3.05	.75
<10> 出来る限り大人(保育者や親)が指示を出さないような関わり方をする。	2.98	.65
<11> 子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。	3.35	.59
<12> 友だちとのトラブルを経験する。	3.62	.56
基本的活動	3.73	.30
古典的活動	3.60	.50
入学準備	2.84	.56

次に、上記の「幼児期に必要なこと」について、因子分析を行う。その結果、下記の3つの因子が抽出された。抽出された因子については、以下の通り命名された。

因子Ⅰ：「基本的活動」…<4>絵本の読み聞かせを行う。<12>友だちとのトラブルを経験する。<2>草花、生き物など、自然と親しむ。<11>子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。<1>外で身体を動かして遊ぶ。

因子Ⅱ：「古典的活動」…<6>絵を描く機会を与える。<7>歌を歌う機会を与える。

因子Ⅲ：「入学準備」…<5>平仮名の書き方を教える。<8>一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。<9>手の届くところに触りたいものがあっても我慢させるなど、敢えて我慢する機会を設けて指導する。

次に、これらの抽出された因子を用いて、「幼児期に必要なこと」と調査対象者の校種及び保育・教育歴との関連について分析を行う。

表3に示す通り、校種の学年が上がるほど、また、教育歴が長くなるほど、「基本的活動」の

必要性を低く認識し、入学準備活動の必要性を高く認識していることが示された。

その背景として、項目ごとに相関をみると、勤務校種の学年があがるほど、また、教育歴が長いほど、「絵本の読み聞かせを行う。」必要性が低く認識されること、勤務校種の学年があがるほど、「外で身体を動かして遊ぶ。」「友だちとのトラブルを経験する。」ことの必要性を低く認識すること、教育歴が長くなるほど、「子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。」必要性を低く認識する傾向がみられた。

また、勤務校種の学年が上がるほど、「平仮名の書き方を教える。」ことの必要性が、そして、教育歴が長くなるほど、「一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。」ことの必要性が高く認識される傾向がみられた。

表3 勤務校種（学年）、教育歴と「幼児期に必要なこと」との相関係数

		幼・保 —小低 —小高 —中— —高	教員歴	<1> 外 で身体 を動か して遊 ぶ。	<2> 草 花、生 き物な ど、自 然と親 しむ。	<3> 英 会話を 習う。	<4> 絵 本の読 み聞か せを行 う。	<5> 平 仮名の 書き方 を教え る。	<6> 絵 を描く 機会を 与える。	<7> 歌 を歌う 機会を 与える。	<8> 一 定時間 きちんと 席に着 いてい られる ように 訓練す る。	<9> 手 の届く ところ に触れ たいも のがあ っても 我慢さ せるな ど、教 えて教 える機 会を設 けて指 導する。	<10> 出 来る限 り大人 （保 育者や 親）が 指示を 出さな いよう な関わ り方を する。	<11> 子 どもの 考えを 反映さ せるこ とがで きる機 会を設 ける。	<12> 友 だちと のトラ ブルを 経験す る。	基本的活 動=④ 絵本— ⑫トラ ブル経験 +②自 然体験— ⑪考え 反映— ①外で 運動/5	古典的 活動_歌 絵=⑥ 絵を描く +⑦ 歌を歌う /2	入学準 備=⑧ 着席訓 練+⑨ 我慢訓 練+⑤ 平仮名 /3
幼・保 —小低 —小高 —中— —高	Pearson の相関 係数	1	-0.014	<b>-0.237*</b>	-0.162	.074	<b>-0.278*</b>	<b>-0.241*</b>	.075	-0.031	.074	.103	-0.053	-0.016	<b>-0.228*</b>	<b>-0.238*</b>	.030	<b>-0.195*</b>
	有意確 率(両 側)		.904	<b>.033</b>	.148	.513	<b>.012</b>	<b>.032</b>	.508	.786	.514	.362	.638	.890	<b>.041</b>	<b>.032</b>	.789	<b>.085</b>
教員歴	Pearson の相関 係数	-0.014	1	-0.025	-0.042	-0.133	<b>-0.228*</b>	.141	-0.166	-0.148	<b>-0.257*</b>	.150	-0.112	<b>-0.379**</b>	-0.116	<b>-0.268*</b>	-0.164	<b>-0.230*</b>
	有意確 率(両 側)	.904		.823	.705	.234	<b>.038</b>	.208	.134	.185	<b>.020</b>	.176	.314	<b>.000</b>	.297	<b>.014</b>	.140	<b>.039</b>

続いて、以下の分析は、平成 27 年度に得られたデータによるものである。

平成 27 年度については、小・中・高校の教員 82 名から回答が得られた。回答者の性別分布は、男性が 13 名（15.9%）、女性が 69 名（84.1%）であった。回答者の勤務校種の分布は、保育所が 31 名（37.8%）、幼稚園が 35 名（42.7%）、小学校が 14 名（17.1%）、中学校が 2 名（2.4%）、高校は 0 名であった。保育士・教育歴の平均は 13.3 年であり、最大値が 39 年、最小値は 4 か月であった。また、保育士としての勤務歴と教育歴をそれぞれ記載した回答も見られた。

## (2) 子どもの生活の自立に関する保育者・教員の意識について

<13>～<18> は、子どもの衣食住における自立に関する質問を行っている。これらのうち、質問番号が奇数である「<13> 食具等を正しく使って食べることができる」「<15> 衣服の着脱が一人で出来る」「<17> 遊んだ後の片づけができる」はそれぞれ、衣・食・住

にかかわる身近生活の基本的な自立に関する質問である。一方、質問番号が偶数である「<14> お腹が空いたら、食べたいものを自分で用意できる」「<16> 気温や天候に合わせて、衣服の着脱が自分でできる」「<18> 身の回りの空間等を自分が心地よい状態にできる」は先に挙げた衣・食・住の自立よりもさらに高次の自立に関する質問であり、自分自身でよりよい状況を作り出すことができる、いわば行動を伴う心的な自立を意味している。

それぞれの質問項目について、「とても必要」を4、「必要」を3、「あまり必要ではない」を2、「必要ではない」を1とする4件法で回答を求めた結果、それぞれの平均値は<13>では3.62、<14>では2.65、<15>では3.84、<16>では3.64、<17>では3.83、<18>では3.33であり、いずれも2.5以上である。回答結果の集計にあたっては、「とても必要」を4、「必要」を3、「あまり必要ではない」を2、「必要ではない」を1としていることから、これらの自立について、保育者・教員はおおむね「必要である」と考えているといえる。

次に、衣・食・住の自立について、身近生活の基本的な自立と行動を伴う心的な自立のいずれをより必要と考えているかをとらえるために、衣・食・住それぞれについてt検定を行う。その結果、<13>と<14>（食）、<15>と<16>（衣）、<17>と<18>（住）のいずれにおいても有意差がみられ（食： $t(78)=12.761$ 、衣： $t(81)=3.660$ 、住： $t(81)=7.633$ 、いずれも $p<.01$ ）、身近生活の基本的な自立の方が行動を伴う心的な自立よりも回答の平均値が高い。このことから、行動を伴う心的な自立に比べ、身近生活の基本的な自立の方がより「必要である」と考えられていることが明らかになった。

さらに、これらの6つの質問について、回答者の対象とする子どもの発達段階との関連をみるために、保育所・幼稚園教諭群（保・幼群）と小学校・中学校・高等学校教諭群（小学校以上群）の2群に分け、t検定を行う。その結果、2群間で有意差がみられたのは、「Q15 衣服の着脱が一人で出来る」のみであり、その他の質問項目に対する回答では2群間に有意差はみられなかった。有意差がみられた「Q15 衣服の着脱が一人で出来る」（ $t(16.571) = 2.149$ ）では、保・幼群の平均値は3.91、小学校以上群の平均値は3.56であり、小学校以上群よりも保・幼群の方が衣服の着脱に関する自立を必要であると考えていることが明らかになった。しかし、それ以外の自立に関しては、2群間に有意な差は認められなかったことから、衣・食・住の自立について、保育者・教員の感じている必要性には差が認められないといえる。この点については、さらに（4）において詳細な分析を行う。

### （3）子どもの運動や行動および身体に関する保育者・教員の意識について

質問項目<19>～<27>は運動や行動および身体に関する質問である。その内、項目<19>～<21>は幼児の具体的な運動技能に関する質問、項目<22>～<26>は幼児の運動活動における社会的行動規範に関する質問、そのうち項目<23>～<25>は幼児の運動活動における認知、情意に関する側面も含まれている。<26> <27>は指導に関する質問であり、<26>は特に社会的行動規範、<27>は特に技能に関する質問である。

9項目の質問のうち、<19> <20>の項目を除く全てにおいて、「必要」もしくは「とても必要」という回答であった。特に「<22> 遊具での順番待ちをすることができる」、「<25> 遊びに没頭する」は「とても必要」という回答が多かった。「<19> とび箱で開脚とびができる」、「<20> 鉄棒で逆上がりができる」について、「必要」と「あまり必要ではない」に二分し、平均値も全ての質問項目の中でも低い値となった。

総じて、運動や身体面における指導内容に関する意識について、技能ならびに社会的行動規範の主に二つの側面について、概ね必要性が高く認識されていたが、技能面での「開脚とび」「逆上がり」の具体的な技の習得に関する必要性は、他の質問項目に比較して低く認識されていた。また、「様々な動き」「座位姿勢」といったことも含めて動きの習得という技能に関する指導内容よりも、「順番待ち」「仲間との協力」「ルールの理解」といった社会的行動規範に関する指導内容に関する必要性が高く認識されていた。また、「遊びへの没頭」という情意面も高く認識されていた。

#### (4) 平成 27 年度の調査全体の分析

回収されたアンケートの結果について項目 1 から項目 27 までの回答の単純集計と平均値を表 4 に示す。

表 4 より、回答者から幼児期の教育において必要性が高いと感じられている項目は、平均値の高い順に「<1> 外で身体を動かして遊ぶ」、「<2> 草花、生き物など、自然と親しむ」、「<4> 絵本の読み聞かせを行う」、「<15> 衣服の着脱が一人で出来る」、「<17> 遊んだ後の片付けができる」、「<25> 遊びに没頭する」である。

一方、幼児期の教育において必要性があまり高くないと感じられていた項目は、低い順に「<3> 英会話を習う」、「<19> とび箱で開脚とびができる」、「<20> 鉄棒で逆上がりができる」、「<5> 平仮名の書き方を教える」、「<14> お腹が空いたら、食べたいものを自分で用意できる」、「<9> 手の届くところに触りたいものがあっても我慢させるなど、敢えて我慢する機会を設けて指導する」である。

##### 1) 勤務校種による回答傾向の分析

回答者が現在勤務している校種によって回答傾向が異なるかを検討するため、勤務校種を独立変数、27 の項目を従属変数とした一元配置分散分析を行う。有意差が認められたのは、項目 5 ( $F(3,78)=9.39, p<.01$ )、項目 11 ( $F(3,77)=2.87, p<.05$ )、項目 12 ( $F(3,78)=5.49, p<.01$ )、項目 15 ( $F(3,78)=5.78, p<.01$ )、項目 16 ( $F(3,78)=6.72, p<.01$ )、項目 17 ( $F(3,78)=4.56, p<.01$ )、項目 18 ( $F(3,78)=3.42, p<.05$ )、項目 19 ( $F(3,77)=2.76, p<.05$ )、項目 23 ( $F(3,78)=4.58, p<.01$ )、項目 24 ( $F(3,78)=3.27, p<.05$ ) であった。これらの項目について Tukey 法による多重比較を行った結果を図 1、図 2、図 3 に示した。なお有意水準は 5%とした。

図1より、項目5については、「保育所」と「幼稚園」、「幼稚園」と「小学校」、「幼稚園」と「中学校」でそれぞれ有意差が見られ、項目12については「保育所」と「幼稚園」、「幼稚園」と「小学校」でそれぞれ有意差が見られた。

図2より、項目15については、「保育所」と「中学校」、「幼稚園」と「中学校」でそれぞれ有意差がみられ、項目16については、「保育所」と「幼稚園」、「保育所」と「中学校」、「幼稚園」と「中学校」、「小学校」と「中学校」でそれぞれ有意差がみられ、項目17については「保育所」と「中学校」、「幼稚園」と「中学校」、「小学校」と「中学校」でそれぞれ有意差がみられ、項目18については「保育所」と「幼稚園」で有意差が見られた。

図3より、項目23については「保育所」と「幼稚園」で有意差がみられた。

## 2) 保育・教育歴による回答傾向の分析

各項目の必要性について、保育・教育歴との関連性を検討した。なお、保育士歴と教員歴がそれぞれ記載されていた場合は、それらを合算したうえで分析を行った。保育・教育歴の年数と各項目について Pearson の相関係数を分析したところ、いずれの項目においても有意な結果は得られなかった。

表 4. 各項目の単純集計と平均値

	度数				平均値
	4 とても必要	3 必要	2 あまり必要ではない	1 まったく必要ではない	
<1> 外で身体を動かして遊ぶ。	80	2	0	0	3.98
<2> 草花, 生き物など, 自然と親しむ。	75	7	0	0	3.91
<3> 英会話を習う。	0	18	53	11	2.09
<4> 絵本の読み聞かせを行う。	74	8	0	0	3.90
<5> 平仮名の書き方を教える。	8	30	42	2	2.54
<6> 絵を描く機会を与える。	56	26	0	0	3.68
<7> 歌を歌う機会を与える。	65	17	0	0	3.79
<8> 一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。	27	45	10	0	3.21
<9> 手の届くところに触りたいものがあっても我慢させるなど, 敢えて我慢する機会を設けて指導する。	10	49	20	2	2.83
<10> 出来る限り大人(保育者や親)が指示を出さないような関わり方をする。	14	59	7	0	3.09
<11> 子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。	55	26	0	0	3.68
<12> 友だちとのトラブルを経験する。	62	20	0	0	3.76
<13> 食具等を正しく使って食べることができる。	50	32	0	0	3.62
<14> お腹が空いたら、食べたいものを自分で用意できる。	3	47	27	2	2.65



<15> 衣服の着脱が一人で出来る。	70	11	1	0	3.84
<16> 気温や天候に合わせて、衣服の着脱が自分で出来る。	55	25	2	0	3.65
<17> 遊んだ後の片付けができる。	68	14	0	0	3.83
<18> 身の回りの空間等を自分が心地よい状態にできる。	33	43	6	0	3.33
<19> とび箱で開脚とびができる。	1	27	48	5	2.30
<20> 鉄棒で逆上がりができる。	1	36	42	3	2.43
<21> 用具、遊具を用いて、あるいは用具なしで、様々な動きができる。	33	46	3	0	3.37
<22> 遊具での順番待ちをすることができる。	60	22	0	0	3.73
<23> 仲間と協力して運動用具を準備することができる。	45	35	2	0	3.52
<24> 鬼遊びやスポーツのルールを理解して、ゲームすることができる。	53	29	0	0	3.65
<25> 遊びに没頭する。	67	14	1	0	3.80
<26> 屋外での集合の際、きちんと整列できるように訓練する。	23	53	5	0	3.22
<27> 椅子に座る姿勢を良くするように指導する。	26	54	1	0	3.31

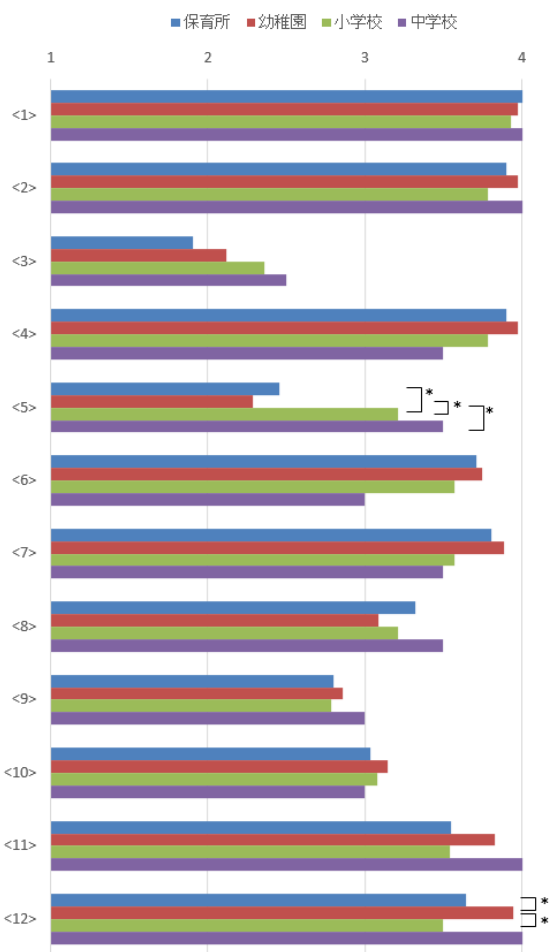


図1. 勤務校種ごとの項目 1~12 の平均値

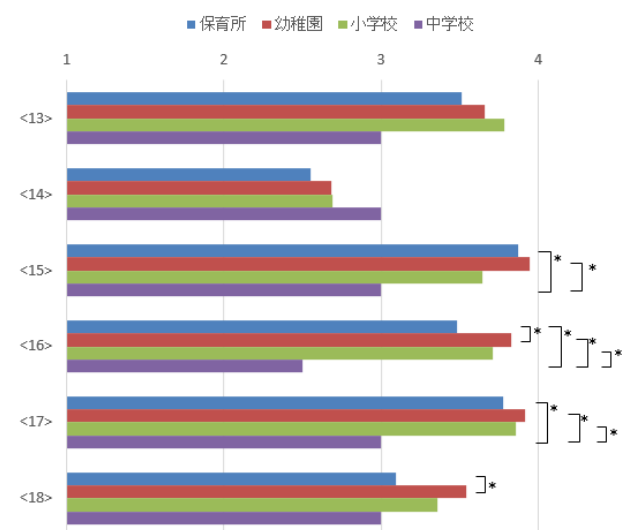


図2. 勤務校種ごとの項目 13~18 の平均値

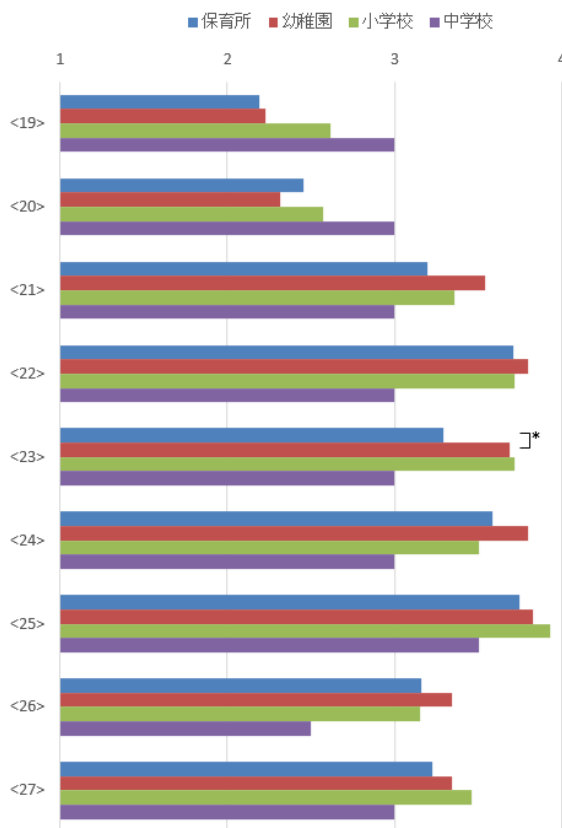


図3. 勤務校種ごとの項目19～27の平均値

#### 4. まとめ

全体としては、幼児教育に対して、小学校入学準備を求める意識は、幼児期における基本的な活動を認める意識と比較して、低い。しかし、勤務校種の学年があがるほど、また、教育歴が長くなるほど、幼児教育に対して、心身ともにのびのびと主体性を持って活動を行うことよりも、むしろ、小学校入学に向けての準備の必要性をより高く認識している傾向がみられる。校種が上がるにつれ、その場における教育の難しさの一因を、そこに至るまでの教育において子どもに必要な力が身につけていないことに求める傾向がみられることと関連しているだろう。また、教育歴が長い者ほど、幼児教育に入学準備の必要性を強く認識することは、「子どもが変わった」という意識と連動して生じているのかもしれない。

また、生活の自立に関する保育者・教員の意識は一定の高さを持つものの、行動を伴う心的な

自立に比べ、身近生活の基本的な自立の方がより「必要である」と考えられている。さらに、その傾向は保育者と小学校以上の教員間での違いは認められない。このことは、幼児期の子ども生活の自立についての意識において、勤務校種に関わらず「身近生活の自立」に重きが置かれていることを意味している。この結果から、勤務校種を問わず、保育者・教員による幼児期の発達段階の理解がなされているとの見方ができよう。しかし、この点について、さらに詳細に校種を細分化してみると、幼い幼児を対象とする保育者の方が、より高い年齢の子どもを対象とする中学校教諭よりも、幼児期の子ども生活の自立について必要性を感じていることが明らかになった。その傾向は特に「衣」「住」に現れており、中学校教員が幼児期の子ども「衣」「住」の自立に対する認識がより低いことが明らかになった。このことから、比較的年齢の高い子どもとかかわる教員においては、十分な幼児理解や生活の重要性への理解がなされていないことが示唆される。また、「衣」「住」の行動を伴う心的な自立（＜16＞＜18＞）については、幼稚園教諭の方が保育士よりもより必要性を感じているとの結果も大変興味深い。

さらに、運動・健康面に関する保育者・教員の意識については、技能ならびに社会的行動規範については必要性が高く認識されているものの、「開脚とび」「逆上がり」といった技能面の具体的な技の習得に関する必要性は、他の質問項目に比較して低く認識されていた。また、動きの習得という技能に関する指導内容よりも、社会的行動規範に関する指導内容に関する必要性が高く認識されていた。また、「遊びへの没頭」という情意面も高く認識されていた。運動・健康の視点から幼児期の教育への意識を問われると、技能よりも社会規範や情意に重きを置く保育者・教員の意識が伺える。

さらに、回答者の勤務校種及び保育・教育歴との関連について分析を行った結果から、勤務校種による差異はみられるものの、保育・教育歴との関連はみられないことが明らかになった。先にも述べたように、勤務校種については、特に生活の自立に関する意識の差異が多く認められた。また、「＜5＞平仮名の書き方を教える」のように、小学校以降での学びに直結するものについては、保育士・幼稚園教諭よりも小学校・中学校教諭においてその必要性の認識が高く、「＜12＞友だちとのトラブルを経験する」「＜23＞仲間と協力して運動用具を準備することができる」については、特に幼稚園教諭においてその必要性の認識が高い。このことは、勤務校種によって、幼児期の子どもに対する認識の違いがあることを意味している。一方、保育・教員歴と各質問項目に対する必要性の認識には関連がなく、保育・教育経験が幼児期に必要な教育内容や生活の自立、運動・健康面に対する意識には影響を与えないことが明らかになった。このことから、幼児期の子どもに必要な教育内容、生活の自立、運動・健康面に対する意識に対しては、勤務校種が影響を与えるものの、保育・教育歴は影響せず、経験による意識の変化は生じないことが示唆された。

以上の結果は、調査対象者の「意識」に関するものである。今後は、その「意識」がどのように「かかわりや指導」と結びつき、幼児期の子どもたちの育ちを支えているのか、より詳細な検

討が必要であると考えられる。